

令和 2 年 6 月 20 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02467

研究課題名(和文) 明治・大正期文学の内面叙述における「ジェンダー・トラブル」に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study of Gender Trouble in the Interior Monologues of Meiji and Taisho Period Literature

研究代表者

石原 千秋 (Ishihara, Chiaki)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：00159758

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：明治期の文学では女性は統一的な自我を持ち得ないと考えられていたので、女性の内面は「矛盾」という言葉で形容されることが多かった。しかし、男性知識人の内面も「矛盾」していると気づいた作家が、夏目漱石だった。

たとえば、『彼岸過迄』『行人』『こころ』といういわゆる後期三部作の男性知識人主人公たちは、自己の内面が「矛盾」していることに悩んでいる。これを同時代の文学の中に置いてみれば、男性知識人を書いているつもりが、知らずも女性の内面を書いていたことになる。これが文学上の「ジェンダー・トラブル」である。近代文学においてはじめて女性の内面を書いたのは、漱石だった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

女性の内面は生物学的な女性に固有のものではなく、社会的な女性性による言説のことである。それがいつ、どのように可能になったのかはいわゆる実証できることではない。そこで、特に漱石の時代に女性の内面が「矛盾」として理解されていたことに注目して、この課題にアプローチした。この実証できないことを課題とするアプローチにも学術的意義がある。

研究の結果、漱石文学では知識人男性主人公が「矛盾」という女性性を帯びており、教養のある女性主人公が男性性を帯びていることが明らかになった。これを文学上のジェンダー・トラブルと呼びたい。内面がいかに社会的要素を帯びているかを明らかにしたことに社会的意味がある。

研究成果の概要(英文)：Synopsis: In Meiji Period literature, women's inner worlds were often labeled "contradictory" as it was believed that women could not possess a unified ego. However, the novelist, Natsume Soseki, observed that the inner worlds of male intellectuals were equally full of contradictions. For example, his late works, *To the Spring Equinox and Beyond* (Higan-sugi made, 1912), *The Wayfarer* (K-jin, 1913) and *Kokoro* (Kokoro, 1914) which are considered a trilogy, feature as protagonists male intellectuals who grapple with their inner conflict. While, in the context of contemporaneous literature, the intention may have been to depict male intellectuals, Soseki was in fact inadvertently writing about women's inner worlds. And therein lies modern literature's "Gender Trouble". Soseki was the first modern novelist to depict women's inner worlds.

研究分野：日本文学(近代文学)

キーワード：ジェンダー・トラブル 女性性 男性性 内面の社会性 漱石文学 男性知識人

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究上、フェミニズム批評が定着して以降、日本の近代文学はいつ女性の内面が書けるようになったのが問題となっていた。女性を書く名人とも言われていた谷崎潤一郎や川端康成なども、いまから見れば、女性の体を書いたに過ぎなかったように読める。女性作家も必ずしも女性の内面を書いていたとは限らなかった。それは、女性の内面とは実は社会的なものだからである。

2. 研究の目的

社会的な観点からみて、女性の内面を書くとはどういうことを明らかにすることを目的とした。それは当然のことながらジェンダーの視点を欠くことができない。女性の内面は個人の固有のものを考える思考から解放し、社会の中で何が女性の内面とみなされるのかを確定し、それをいつ、だれが、どのようにして、文学として書き得たのかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

アメリカの比較文学者ジュディス・バトラ『ジェンダー・トラブル』で提案した、バトラは、人間の心と体の生の不一致がトラブルと認識されるのは、セクシュアリティのレベルではなくジェンダーのレベルだとする。この思考を援用し、近代文学上、女性の内面が社会的なレベルにおいて女性の内面として書かれたと判断できるキーワードに、たとえば「矛盾」を選び、その文学上の使われ方を分析した。

4. 研究成果

当時、女性は統一した自我を持っていないと考えられていたから、女性は「矛盾」と形容されることが多かった。夏目漱石は、初期から「男らしくない」知識人男性を書き続けた。「太平の逸民」と呼ばれる『吾輩は猫である』の登場人物からしてそうである。『坑夫』ではまさに自己の内面が「矛盾」していると感じる青年を書いた。後期三部作では、自己の内面が「矛盾」していることに悩む男性知識人を書いた。これを同時代的な文学状況の中に置くなら、漱石こそが男性知識人を書いているつもりでありながら、知らずも女性の内面を書いてしまっていたのである。絶筆になった『明暗』では男性主人公が優柔不断で「矛盾」していることに開き直っており、女性主人公のお延がそれまで男性知識人主人公が口にしたくてもできなかった「絶対の愛」を口にするなど、明らかに男性性と女性とがひっくり返っている。まさにジェンダー・トラブルが起きた文学テキストだったことが明らかになった。このように、女性の内面を書くことの社会的な意味を明らかにした。

漱石文学に即して、説明しよう。

『吾輩は猫である』ではかなりはっきりしたウーマンヘイティングが出ているが、同じ時期に書かれた『草枕』では、すでにジェンダー・トラブルの要因が見られる。本はどこから読んでもいいという洋画家と那美とのやりとりがある。ここは漱石の芸術論(物語性の否定=因果関係の否定)を小説を中心に披歴した箇所として理解されている。しかし、「筋を読まなければ何を讀むんです。筋のほかに何か読むものがありますか」という那美の言葉に、洋画家が「余は、矢張り女だと思った」場面は意義深い。なぜなら、当時、女性には「矛盾」という形容が一般的で、女性は因果関係を踏まえた統一的なアイデンティティを持たないと思われていたからである。洋画家が物語の「筋」を否定し、那美がそれを肯定していることは、男性がアイデンティティを否定し、女性がアイデンティティを肯定することにつながる。芸術論において、男女の逆転、すなわちジェンダー・トラブルが起きているのである。

朝日新聞社入社第一作の『虞美人草』にウーマンヘイティングが顕著に表れていることは、もはや定説となっている。家父長制を背景に、女性の自我と自由な挿入者の選択を徹底的に否定しているからである。ところが、次作の『坑夫』では、青年に「矛盾」という言葉で「人間存在の在り」を語らせている。すなわち、漱石は青年を書きながら、その実女性を書いてしまったのである。漱石がそれをはっきり意識したと推測できるのは、次作の『三四郎』で東京帝国大学新入生の小川三四郎が里見美禰子の不可解な行動に出くわして、その意味が分からず「矛盾だ」と口にさせたときだろう。

『三四郎』の次に書かれた『それから』では、東京帝国大学を卒業した長井代助が主人公だが、彼は自分の美しい肉体に誇りを持っており、化粧さえしかねない男性である。代助は新しい男の身体の実現者なのである。この場合の「新しい」とは男女の境界を越えた男性という意味である。しかも、代助には長井家によって土地持ちの娘との結婚話が持ち上がる。まるで良家の女性が政略結婚をさせられるようにである。長井代助は、長井家の中でジェンダー化されていた、つまり女性ジェンダーという扱いだったことになる。これが『それから』のジェンダー・トラブルである。それは身体と家制度という社会的な規範の中で行われた。

次作『門』は『それから』の「それから」であって、野中宗助が長男でありながら、友人の内縁の妻を奪ったことで、家長としての資格と実質を失ったところから始まる。悩みぬいた野中宗助が鎌倉の禅寺に参禅して与えられる公案「父母未生以前の本来の面目」を宗助は解けないが、この研究テーマに即して言えば、「男女が分かれる前の本来姿とは何か」ということになる。宗助自身は社会的には女性性であるような存在でありながら、彼自身は失われた男性性にとらわれていたというしかない。野中宗助の悲劇は、彼の存在自体がジェンダー・トラブルの産物でありながら、彼はジェンダー・トラブルを生きられなかったところにある。

繰り返すが、明治期の文学では女性は統一的な自我を持ち得ないと考えられていたので、女性の内面は「矛盾」という言葉で形容されることが多かった。しかし、男性知識人の内面も「矛盾」していると気づいた作家が、夏目漱石だった。

たとえば、『彼岸過迄』『行人』『ころ』といういわゆる後期三部作の男性知識人主人公たちは、自己の内面が「矛盾」していることに悩んでいる。彼らは、『門』の野中宗助の末裔だと言ってもいい。『彼岸過迄』の須永市蔵が狼狽えるのは、女性の内面にしか現れないと思込んでいた嫉妬を自分の内面に生まれたことを自覚したからである。まさに内面のジェンダー・トラブルである。この小説の失敗は、その須永の狼狽を家の血筋の問題として意味づけてしまうところにある。そのために、須永は当時の男性知識人が陥っていた憂鬱の系譜に位置付けられてしまったのである。『行人』の男性知識人主人公長野一郎は、女である妻の心がわからないと悩むが、彼が最も苦しんでいるのは、女の感情である嫉妬の自覚である。この小説の前半では、男の友人同士の嫉妬がテーマになっているが、この小説は嫉妬が男同士に生まれること自体を不思議と感じたからこそ前半のテーマとしたのだろう。『ころ』は先生の内面の「矛盾」が女性によって作り出されう過程を書いた小説である。

こうして、漱石は「矛盾」と「嫉妬」を手掛かりにジェンダー・トラブルの不思議を書き続けた。これを同時代の文学の中に置いてみれば、男性知識人を書いているつもりが、図らずも女性の内面を書いていたことになる。これが文学上の「ジェンダー・トラブル」である。近代文学において初めて女性の内面を書いたのは、漱石だった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 石原千秋
2. 発表標題 知識が権力になるとき 漱石のジェンダー・トラブル
3. 学会等名 東アジアの知識交流のメカニズム：知機の生産と伝達（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 石原千秋	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新潮社	5. 総ページ数 232ページ
3. 書名 漱石と日本の近代・上	

1. 著者名 石原千秋	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新潮社	5. 総ページ数 254ページ
3. 書名 漱石と日本の近代・下	

1. 著者名 石原千秋	4. 発行年 2018年
2. 出版社 臺大出版中心	5. 総ページ数 288ページ (pp13 - pp33)
3. 書名 范淑文編 『漱石と 時代 没後百年に読み拓く 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----